虎の穴の制裁？
いいえそれはミスXの性裁です！

某月某日、ウォーゲームを間近に控えたG・W・Mの興行は
トラブルもなく予定通りのプログラムを終了した。
ミスXは、自分に与えられた仕事をいつも通りこなすと、
足早に自分のオフィスに向かっていた。
この所、仕事に追われ性欲を処理する事も出来ないでいたが、今夜は
時間に余裕が出来た為、久し振りにドップリ自慰に耽るつもりでいた。
しかしそんな時、スマートフォンの呼び出し音が廊下に響いたのだった。
「ミスX、ミスターXからのコールです」
ミスXの秘書の通称レディが、預かっていたミスXの携帯を渡してきた。
ミスXは、うんざり顔でそれを受け取る。
「はい、ミスXですが・・・」
「ミスX、早急に話したい事がある、今すぐ私の部屋に来たまえ」
「今すぐに・・ですか？少しお時間を・・シャワーを浴び着替えてから・・」
ミスXの声に微かな警戒と苛立ちが滲む。
「着替えなぞどうでもいい、今すぐ来たまえ！キミ一押しの
タイガー・ザ・ダークについて話したい事がある、待っているぞ！」
ミスXはその瞬間溜息を吐くと、何についての話かを悟った。

それから十五分後、ミスXはミスターXの面前に
立っていた。
「さてミスX、タイガー・ザ・ダークの何についての
話かは、理解できているかね？」
ミスターXは鋭い眼光でミスXを見つめた。
「・・・・はい、タクマ・・ダークのレスリングスタイル
についてではないでしょうか・・・」
「その通り・・・今夜私はタイガー・ザ・ダークの
試合を観た・・が、観客はちっとも盛り上がって
いるように見えなかった、そしてここ数週間の彼の
人気投票での下位低迷・・・・その理由を説明
出来るかね？ミスX」
ミスXは、内心舌打ちをしながら説明を始めた。
「タイガー・ザ・ダークのファイティングスタイルは、
一言で言えば独り善がりの勝つためのプロレス・・・
観客の事は二の次・・・と言った所でしょうか・・・」
「うむ・・・分かっているではないか、ならば何故
キミはそれを修正しないのかね？」
ミスターXは不満を隠そうともせず続ける。
「よいかミスX、ウォーゲームが間近に控えておる、
それまでに観客を沸かせられる一人前のレスラー
に鍛え直すのだ！手段は選ばんでよい！」

ミスXは俯き加減でミスターXの叱責を、甘んじて受け入れている。
「手段は選ぶなと仰いましたが・・それはどんな手段でも・・・？」
「そうだ！キミは調教するのが得意ではなかったのかね？ならば
あらゆる手段を用い、タイガー・ザ・ダークを観客を熱く沸かせる
立派なレスラーに調教してみたまえ！」
この瞬間ミスXは、心と下半身で何かが弾けたのをハッキリ感じた。
「・・・お任せ下さいミスターX、ウォーゲーム開幕までに、
タイガー・ザ・ダークの性根を、叩きなおして御覧に入れましょう」
「うむ、この件に関してはキミに一任する、良い成果を期待している ぞ」
「はっ、お任せ下さいミスターX」
ミスXは笑みを浮かべながらミスターXの部屋を後にすると、
直ぐ様タクマの携帯にコールするのであった。

遅いっ！指定した時間を二十分もオーバーしてるじゃない！

あぁすまないなミスX・・・試合後の筋トレメニューをこなしていたんでね・・・急に呼び出していったい何の用だ？

電話でも少し触れたけどあなたのファイトスタイルをミスターXが怒っているのよ アナタの所為で私が代わりに怒られちゃったじゃない！

あぁ・・・ミスターXか・・・彼は俺のファイトスタイルの何が気に入らないって言うんだ？ここの所俺は負けなしだそれで十分じゃないのか？

アナタ何も理解していないのね・・・プロレスは勝てばいいって訳じゃない事位知っていると思ったけど違ったみたいね・・・まあいいわ・・・早くリングに上がりなさい！

何が言いたいミスX！今更俺にプロレスの何たるかを説くのなら帰らせてもらうっ！

ゴチャゴチャ言ってないで早く上がって来なさい！言っておくけどこれはミスターX直々の命令なのよ？

私だってイベント前で忙しいのこんな事で貴重な時間を浪費するなんて勘弁して欲しいわよ・・・

・・・あぁそういう事か

仕方ないな・・・

どんな事をするのか分からないが早く済ませてくれ・・・この後ケビンと飲みに行く事になってるからな

無駄口叩くのを止めなさいタクマ

ジジジ

いい事？早く済ませられるかどうかはアナタの努力次第なのよ！

さあ時間が勿体ないわ

なっ・・何の真似だミスX！何かしらのトレーニングをさせるんじゃないのか！

う・・うるさいっ！私だってこんな真似したくないわよっ！でも仕方ないじゃないこれもミスターXの指令なんだから！

ガ

ハァ

いや・・・待てよ・・・これは俺をドッキリに掛けてみんなで俺を笑いものに・・・だから胸を露出するフリをして俺の反応を隠し撮りしているに違いない・・・

カメラはどこだぁ？

何をゴチャゴチャ言ってるのよ！

良く聞きなさいタクマこれは冗談でも遊びでもないのよっ！アナタを推してる私の立場も懸かっているんだからっ！

おいっミスX！ドッキリじゃないのか！

ドッキリぃ？そんな訳ないでしょっ！

いや・・・いくら何でもそんな指令出ないと思うが・・・

ゲイ

ブルン

アナタ観客の満足度ランキングで下位争いの常連なの知ってる？

な・・・そうなのか？興味も無いから知らなかったが・・・

ブルン

ブルン

そうでしょうね！タクマよく聞きなさい！アナタは自分さえ良ければ他はどうだって構わないタイプなのよ！

目を逸らしながら話をしているがやはり恥ずかしいのだろうか・・・？

いい事タクマ！今から私がその性格叩き直してあげるわ！この肉体を使ってね！

どう？私の豊満なバストは！

グニィ

ズッ

ど・・どう？と聞かれても・・・

プルルン

いつも何気なく衣類に包まれたモノが視界には入っていたがこうして中身を間近で見ると凄い迫力だな・・・

しかしコレでどうしようって言うんだ・・・

ほらっ！ちゃんと見なさい！凄いでしょ私の胸・・・天然なのよコレ！
ボヨン
ボヨン
なーに？反応が鈍いじゃないこれだけのオッパイ中々生で見れないと思うけどお？
いい？じっとしているのよ！私の命令は全てミスターXの命令と同等の効力を持っていると知る事ね！
命令に逆らったりしたら即虎の制裁を受けてもらうから覚悟するのね！
・・・・・・分かった・・・・じゃあ早いトコ済ませてくれ・・・
ギッ
ギッ
フン！顔はクールを装えても股間のヤングタイガーはとってもホットじゃない！
・・・・・・くっ・・・
ビク
ビク
ビク
やけに素直ね・・・いつもその位素直だったらこっちも苦労しないのだけど

・・・さあてそれじゃあタクマのヤングタイガーと御対面ね・・・フフフ・・・あら以外・・・東洋人はナニが小さいって聞いていたけどタクマは特別なのかしら？
・・・・・・・
ジュルル
でも安心したわぁちゃんと女体に反応してくれて・・・
やだコレ凄い・・・
ビク
ビ・・ク
何この硬さ・・・それにこの反力もうビンビンじゃない！
これが噂のウタマロってモノなのかしらぁ？
ハァ・・ハァ・・まいったな・・・胸を見ただけでこんなに硬くなっちまうなんて相当溜まっていたって事なのか・・・
正直言うとねぇ少し心配していたのよ？
ビン
ビン
ビン
それにしても凄い・・・まだ大きくなってる・・・
・・・・・？何の心配をしていたミスX・・・
アナタとケビンの事よ・・・いっつも仲良く一緒に行動しているから私はてっきりソッチかなって
何の事を言って・・・・・ハアッ？なっ・・・ちっ違うっ！あれはケビンが勝手に付いて来てるだけで・・・

ミスX・・・誤解の無いように言っておくが俺は至ってノーマルな男だからな

マズイな・・・このままだと三分と経たずに発射してしまう・・・

ミ・・ミスX・・・もう少しゆっくり・・・して・・くれないか・・・

なぁに？プロレスじゃぁあんなにタフなのにこっちは打たれ弱いのかしらぁ？

アム

ピチ ピチ

ピク ピク

レロ レロ

ハァム

分かったわよ・・・シブ・・・私の胸見てコレだけ硬く・・・ハム・・・なってるんだから・・・アム・・・それだけで十分ノーマルよね！

ハァ・・

ヒク ヒク

チュプ

モミ

ハァ・・

プルン プルン

やだこの子・・・もうカウパー汁出してるじゃない・・・

ハァ・・・ハァ・・こんな事されたのは高校生の時以来だが・・・フェラチオがこんなに気持ちイイものだとはすっかり忘れていたな・・・

ブル ブル

・・・・そんな事は無い・・・・ん・・・・ただ・・・少しだけ溜まっているから・・・刺激に弱く・・なっているだけ・・だ・・・

フン・・・まぁいいわ
じゃあ今度は私を
愉しませて頂戴

ちょっとムレちゃってるけど
これも男にしてみたら
御褒美なんじゃない？

・・・よっと・・・
ほら・・・舐めやすいように
トップロープに登ってあげたわ

ちょっと濡れてるわね・・・
さあタクマ一所懸命
クンニするのよ！

ハァ・・・

ハァ・・・

なぁに～？
女性器見るの
初めてじゃ
ないでしょぉ？
さぁほら早くなさい！
早く済ませたいんでしょ？

ハァ・・・

あ・・・あぁ・・・・

思ってた以上に
大胆だなミスX・・・

ほらタクマ
しっかり見なさい

どう？
とってもジューシーで
美味しそうでしょお？

ハァ・ハァ・・
ヤダ・・・こんなに
濡れちゃってるじゃない

ハァー

まだ弄ってもいないのに
こんなに愛液が・・・

ハァー・・・

どお？
私の凄く綺麗でしょ
色も形もまだまだ
ティーンに負けない位
自信はあるのよ？

ハァ・・・

さあタクマ
私の極上のオマ〇コを
存分に味わいながら
私を悦ばせなさいっ！

ハァ・・・

これもみんなタクマの
所為なんだからね・・・

ミスX・・・
結構な好き者
なのか・・・？

流石に白人だけあって
色素が薄いから
言う通り綺麗な色だな

形は日本人のソレと
違って少しばかり
大味な印象はあるが
崩れもなく確かに
ティーンに負けない
女性器のようだ・・・

だが何よりミスXは
白人特有の体臭が
まったく気にならない
サプリで抑えているのか？

なに遠慮してるのよ…
その太くてゴツゴツした指
早く突っ込みなさ…あぁ…

ズッ
ビクッ

そ…そう…
さぁ…もう一本…
二本位なら余裕…
ンン……ハアアア…

ハーハー

ヤダ…
何こんなに感じてるの私…
この所忙しくてオナニーさえ
してる時間もなかったから…

ハーハー

タクマの指が私のアソコで
クチュクチュと厭らしい音を
立てて出入りしてるぅ…

ハッ
クチュ
チュプ
ヒク
ハッ
ヒク
アッ

ウソウソ…
こんなんじゃ一分持たずに
先に無様にイカされ
ちゃうじゃない…

ハーハー

駄目よそんなの……
この私が指だけで
しかも僅かな時間で
イクなんてぇ…

プル
プル
プル
アァ…

これは凄い量の愛液だな…
感じ易いのか？ミスXは…

チュク
チュプ
ツプ

しかし久し振りに指いれてみたが
こんなに感触良かったかな…
膣の中って…

次から次に愛液が溢れてくる・・・

それにヒクヒクと小刻みに痙攣してるようだ・・・

ミスXがこんなに感じ易い女性だったなんて・・・以外だな・・・

駄目よ駄目よ！タクマの舌が私のヴァギナを舐めてるって事実だけでこんなにも感じちゃうなんてぇ・・・

クンニだけでイカされるなんて私のプライドが許さないんだからぁ！

ちょ・・・アァ・・・ま・・待ちなさい・・・タクマ・・・ス・・ストッ・・・・・・ン・・・シアァ・・・

ミスXはもう限界なのか・・・？ならば都合が良いなこのままイッってもらうか

タクマ・・・ス・・ストップゥ・・・・
これ以上舐められたらぁ・・・・・

ヤッ！駄目え！
アッ！アア！・・・・・ンアア・・・・
来る・・・来ちゃうーっ！

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ミスX「ハァ・・ハァ・・ハァ・・・」
タクマ「・・・これで俺は解放されるんだよな」
ミスX「ご・・誤解してるみたいだけど・・これは
イッたんじゃないんだからね！」
タクマ「いい加減にしてくれミスX・・・どう見たって
オーガズムに達してただろ」
ミスX「・・・・・・た・・例えそうだったとしても私は
まだ満足した訳じゃないんだから！」
タクマ「無茶苦茶な理屈だな・・・・ゴールポストを
動かすのはフェアじゃないと思うが？」
ミスX「クッ・・・・・そう言うつもりじゃ無くて・・・
タクマはそれでいいのかしら？」
タクマ「何を言いたいのか分からないな・・・」
ミスX「あなたのヤングタイガーはそれでいいのか
って聞いてるのよ・・・その・・・まだ・・・
ギンギンに熱り立ってるじゃない！」
タクマ「・・・・・・・大きなお世話だなミスX・・・」
ミスX「私の股間の熱く濡れたミスXにタクマの
ヤングタイガーを・・・・その・・・入れて
みたいと思わないのぉ!?」
タクマ「・・・・それは・・・・」
ミスX「私は・・・タクマのヤングタイガーが欲しい
タクマもそんな中途半端な状態じゃ
トレーニングに支障が出るんじゃなくて？」
タクマ「・・・・・・そうだな・・・それも一理あるな・・・
その代わり条件がある・・・・」
ミスX「条件？」
タクマ「その・・・リングコスチュームもいいのだが
出来れば普段のビジネス用の服に
着替えて欲しいんだが・・・」
ミスX「えぇ!?・・・別にいいけど・・・でも少し時間を
頂戴・・・15分したら戻ってくるわ」
タクマ「それは構わない」
ミスX「オーケー・・・じゃあちょっと待ってなさい」

ミスXはそう言うとリングを降りて着替えに向かった

さ・・さあ着替えて来たわ・・・これでいいのね？
コッ
タクマはこの格好にいつも性的な目を向けていたって事よね！
ボムン
バムン
・・・・くっ・・・・それは否定出来ないな・・・
ほ・・ほら！何してるのよ早く続きをなさい！
フリ
わざわざ着替えて来てやったんだからたっぷり気持ち良くしてもらうんだからね！
プッ
フリ
フリ
分かっているミスX俺も男だからな言った事の責任はキッチリ取らせてもらう

アア・・・
私が着替えて来るまでの間
カチカチだったのね・・・
パンティ穿いてないんだな・・・
あぁ聞いた事がある
欧米では半数以上の女性は
パンティホースの下に
下着は着けないとか何とか
ミスXは胸も尻も
凄い弾力だな・・・
一体何歳なんだ・・・？
ふむ・・・普段から鍛えてる
だけの事はあるって事か・・・
ねぇ・・何してるのよ！
早くその硬くそそり立った
タクマのタイガーを私のXに
入れなさいよっ！
あ・・あぁ
スマン・・・
ハアー！
ハアー！
ハアァ
ヒク
ヒク
ヒク
ビン
ビン
プルン
スル
スリ
スリ
プル
プル

ほ・・ほら・・・早くぅ・・・

ヒク

ヒク

ハァ・・

ズル

アァッ

ヒク

・・・ミスX・・・着替えてる時我慢出来ずにアソコを自分で弄ってたんじゃないのか？

クチュクチュ

アァ・・・

アァ・・・

着替えに行く前よりも激しく濡れてるみたいだから・・・

そ・・それは・・・だ・・だって仕方ないじゃない！アソコが疼いて疼いてどうにもならなかったんだからっ！

ハァ・・

何か問題でもっ!?

プル

ジュッ

ジュッ

ハァ・・

プル

プルン

いや・・・そんなつもりじゃ・・・俺もその間何回か自分で擦ってたから・・・

そ・・そうなの？タクマも・・・？だ・・だったら早くその硬くて逞しいのを・・・私のはしたないXに・・・い・・入れなさいよっ！

ハァ・・

プル

プル

これだけ濡れてれば前儀は必要ないな・・・

ピチャ

ピチャ

ふうぅぅ・・・あぁぁ・・・早く・・・早くぅ・・・

アァ！

そんな急かさないでくれミスX・・・

な・・何勿体ぶってるのよ！いいから今すぐ挿入なさいっ！

ハァ

ハァ

・・・・今入れるから・・・・

ブゥゥ

ブゥゥ

ああぁぁ・・・・何年振りかの挿入・・・・凄いな・・・こんなにキツい締め付けだったか・・な・・・？

ビクッ

ビクッ

アッ

アッ

ハアアアアアアア・・・・タクマの・・・凄い太いのぉ・・・入ってキタァ・・・・・・・いいわ・・・そのまま・・・突いて・・・突いて頂戴っ！

ハァッ

ハァッ

ブルン

ハァ・・・

ブヴッ

アアッ凄いい！何この硬さぁ・・・

東洋人のペニスは初体験だけどこんなにイイなんて知らなかったわぁ！

膣内をタクマのペニスがゴリゴリ抉ってくるぅ・・・

生挿入って考えてみたら初めての経験だがゴムが無いってだけでこんなにも感度が上がるものなのか・・・

ああっイイわ！私のXの中でタクマのタイガーが暴れてるぅー！

アア・・もっとよ・・・もっと激しく腰を振りなさいっ！

締め付けが益々キツくなって・・・・こんな凄い吸い付き・・・生まれて初めてだ・・・・

はーっ凄いわーっ！タクマのタイガーが私の膣(なか)を掻き回してるーっ！

もっと早く東洋の男を試しておくべきだったわぁ・・・・

ウタマロ最高だわぁ・・・・

もっとーお もっとよーお！私のXを犯し尽くすのよ！

ハーッ
チポッ
パン
ハッ
ブルン
チポッ
ハッ
パン
ブルン
チポッ
ハッ
パン
ブルン
チポッ
ハッ
パン

何だコレ・・・・腰が止まらない・・・・こんな凄いセックスは初めてだ・・・

アーッ

パン

ブルルン

パン

ジュッ

い・・いいわタクマ！そのまま私の子宮を食い破ったって構わないんだからぁ！

リアッ

ズッ

パン

ジュッ

ん・・・ミスX・・・そんな・・キツく締められたら・・・あんたが満足・・・する前に・・・俺が果てちまう・・・

ウッ

パン

ジュッ

ジュッ

パン

辛抱なさい！あなた屈強な虎の穴のファイターでしょっ！

アー

チップ

リアー

パン

チブッ

む・・無理言わないでくれナニの耐久は簡単には鍛えられないんでね・・・

ミスX・・・・
まだイケないのか・・・？

アーッ！ハアーッ！
ま・・まだよお！
イッって欲しかったら
もっと努力なさいっ！

で・・でもお・・・
イイ感じよお！

クッ・・・マズイな・・・
早くイッってもらわないと
また難癖付けられていつまで
経っても終われないぞ・・・
・・まさかとは思うがこれが
虎の穴の制裁なのか・・・？

ブル
プル
ブル
ブル
ブル
ブル
ニアー！
オォ・・・
ニッ
オォ・・・
ペチッ
ペチッ
ペチッ

く・・・さっきはあれだけ簡単にイッたくせに今度は粘るじゃないか・・・

い・・・良いわぁぁぁ・・・そのまま激しくぅ・・・突き続けなさいい・・・

・・・どうするミスXが果てる前にコッチが果てちまう・・・どうすればイッってくれるんだ？

クッ・・・ミスX・・・少し黙ってて・・・くれないか・・・

ハアァ・・ハアァ・・・何泣き言ってるのよぉ！

いいわタクマ・・・どんな事しても構わないわぁ・・・

ハアァァ・・ハアァァ・・・タイガー・ザ・ダークの力はぁ・・・その程度だったの・・かしらぁ？ガッカリ・・だわねえ・・・

私をたっぷりイカせなさいっ！

な・・・どんな事でも・・・？

そうよぉ・・・手段を選ぶ事ないわ・・・

すまないが
ストッキングを
脱いでくれないか？

ハァ…

え…何…？
…まっいいわ…
生足が良かったの？

そう言う訳じゃないが…

ハァ

シュルル

じっとしていてくれ
確認するがミスX
どんな手段でも
絶頂させれば
いいんだな？

ハァ

スッ

スッ

さぁ…
これでいいかしら？

ハァ…

どんな手段でもって…
まぁ…そうね…
…何をするの？

少しアクロバティックな方法で
やらせてもらうぞミスX

アンッ

やだ…こんな体位
ポルノビデオの中でしか
見た事無いわ…
でもタクマ
体位が変わった位で
私が満足するなんて
思わない方が…

ガ

バァ

ア

そうじゃないんだ
ミスX…
少しアブノーマルな
方法でやらせて
もらうんだ

なっ…？
ア…アブノーマルぅ…!?
な…何をするつもりなの!?

ギン

ギン

えっ!?
な・・何っ!?

ちょ・・ちょっと
タクマっ!
うっ嘘でしょ?

ハァ
ハァ
ピト
ギン
ギン
グ
イィ

何するつもりよっ!
そこヴァギナじゃ
無いのよっ!?

嘘っ・・ヤダっ!
そんな所にペニス
入れるんじゃ
ないわよぉっ!

プル
プル
プル
ハァ・・
ハァ・・

んあぁ・・・・
やだぁ!先っぽが
押し入ってくるぅ・・・

く・・苦しい・・・
駄目ぇ・・・そんな
太いの・・入る訳ぇ・・
ないじゃなぁ・・・い・・・

オオ
メリ
メリ
ジョ

すまないミスX・・・
気の強い女性は尻の穴が弱いと
インターネットで見た事がある・・・
こっちも限界なんでね
このまま一気に昇天してもらう!

フル
フル
フル
ジァ

なっ・・何なのそれっ!?
ちょ・・そんな子供じみたぁ・・・
下らないネットの噂ぁ・・・んぅ
・・・信じてるって・・言うのぉ・・・・!?
そんなのフィクションのぉ・・・
中のネタじゃないのよーぉ!!

プル
プル
ジァッ
オオ

い・・いい事タクマ!
今すぐやめなさいっ!
これは命令よぉっ!

どんな手段でもいいと
あんたが言ったんだぞ!
こっちもイチかバチかなんだ
覚悟を決めてくれミスXっ!!

プル
プル
ヲプププププ

どんな手段でもって確かに言ったけど！

まさか性器以外に突っ込んでくるなんて思わないじゃないっ！

今更そんな・・・指摘されても・・もう遅い・・・

ハアッ

ハアッ

ハアッ

何・・なのよ・・コレぇ！
ンオオオオ・・・・
グゥ・・ウゥ・・ヒウゥ・・

アヌスが・・こんなに・・も
感じる・・器官だった・・
なんてええええ・・・・

・・・で・・でも
気持ちイイから
今回は特別にい
許してあげるわぁ

ハアァ・・ハアァ・・・
それにしても
凄い快感よお！
あぁぁぁぁ・・・
頭とアヌスが
痺れてきてぇ・・・
コレ・・ヤバイわぁ

お尻が熱い・・・
アソコもいつも以上に
敏感になってる・・・

こっちの穴も
凄い締め付けだな・・・
抜き差しする度に
亀頭が強く吸引される・・・

本当ならぁ・・
無理矢理アヌスにペニス
突っ込むなんて行為・・・
絶対に許さないのよぉ・・・

ミスX・・・もう限界だ・・・
どこに射精すればいい！

え・・？もう限界い？
ハァ・・ハァ・・ハァ・・・
いいわタクマ・・・
膣内じゃなければ
好きな場所に・・・

ヌッポ
ヌッポ
ヌッポ

ハァ
ハァ
ハァ
さあ何してるのよ！早くタクマのモノでもう一度私のアヌスを塞ぎなさいよっ！
お尻の穴がスースーしてる・・・いやだ・・ムズムズが止まらないわぁ・・・
ヒクヒク
何だやっぱり尻の穴が弱いんじゃないか
ち・・違うわよ！お尻だったら中で出されても妊娠しないじゃないそ・・それだけの事よ！
ペチ
ペチ
オッ
ビクッ
ビクッ
ハァ
ハァ
ハァ
そ・・そうよっ！だから早く入れなさいっ！
ジッ
フル
フル
ヌリュー
ヌリュー
そう慌てるなミスX最後は俺のペースでイカせてもらう

ちょ・・ちょっとお何主導権取ろうとしてんのよ！タ・・タクマア立場を弁えなさい！

ヒク ヒク ヒク

ミスXたまには立場を違えるのも悪くはないだろ？

フザケタ事言ってないで早くアナタのペニスお尻の穴に入れなさいよっ！

そんなにコレが尻の穴に欲しいのか・・・いいだろう・・・

チリュン チリュン

ハァァ ハァァ ハァァ

ミスXよそのフシダラな肛門で望み通りイカせてやるぞ！

くぅあぁぁぁぁぁ・・・は・・入ってきたぁぁぁぁ・・・

そう・・・この快感は排泄を我慢に我慢を重ねた後に一気に放出する時の快感に似てる気がするわぁ

ジョォ チブブブブ ビクッ ビクッ ハァァ ハァァ ハァァ チプチュ チプチュ

やぁだこれぇ・・・クセになっちゃったらどうしよぉ・・・

ハァァー

ハァァー

ああああ・・・・駄目だ・・・もうここから一気にラストスパートと行かせてもらう！

チュプ

チュプ

チュプ

オオオオオ・・・オオオオッ！来るーっ！凄ーい！お尻感じちゃうーっ！

ハァッ

チュプ

もっとお・・・もっと激しく突いてぇ・・・・

ズプッ

チュプ

ハァッ

チュプ

アヌスがこんなにも気持ち良いとは・・・

チュプ

ハァッ

チュプ

ハァッ

チュプ

おお・・おお・・んあああ・・・

チュプ

ハァッ

チュプ

ハァッ

チュプ

ハァッ

お尻の穴がヒリヒリして痛い筈なのにい・・・何でこんなにも気持ち良いのよーお！

ンオアアアアアッ！・・・アアアアアア！こ・・このまま・・・私の直腸(なか)で果てなさいいい！そしてそのまま天国にい・・・連れて行くのよーお！

くっ・・・言われなくともお・・・連れて行ってやる！

ハァ・・・ハァ・・・・来る・・・来ちゃう・・・凄ーいのが来ちゃうーっ！

くうう・・・こんなにも凄い快感は初めてだ・・・

イクぞおミスX！アンタの望み通り俺の精子を注いでやるぞお・・・！

ビクッ
ドプ
ドプ
ビクッ
ビュビュ
おお・・・ああぁぁ・・・・はあぁ・・・あぁぁ・・・！
んあぁぁぁぁ・・・何だこれはぁ・・・・はあぁぁぁぁ！
ンオオオオオオ・・・で・・出て・・るぅ・・・凄くぅ・・・イッパイ・・・
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ンアアアアアアア！お尻にタクマのお・・・タクマの凄い量の精液がぁ・・・・！
ファハアアアー
ファー
こ・・これ・・・・凄ーい・・・・ぎもぢい・・・いいいいい・・・
ファ
フル
ツッー
フル
ファ

はあ・・はあ・・はあ・・・
ミスX・・・これで満足か？
今確かに絶頂に達した筈だな
ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・
凄・・・アナルセックス凄過ぎい・・・・
それにしてもタクマったら
どれだけ射精(だ)したのよぉ・・・
お腹ゴロゴロしてきたじゃない・・・
なんて下品な音なのよぉ・・・
タクマの精液がアヌスから
溢れ出ていってるわぁ・・・
これ絶対癖になるぅ・・・・
タポン
ブポポ
プル
プル
プル
ハァァァ
ハァァァ
ブル
ブル
ハァァァ
ブリポポポ
ドロロロ

ケビンが待っているんでね・・・
今後こんな事で煩わせないで
欲しいものだな

ハア・・・

ハア・・・ハア・・・
オーケータクマ・・・
今日はこれで開放して
あげるわ・・・

プル

プル

ハアア・・・

・・・・・・・ぅんっ・・・・!?
何を言っているミスX！
「今日は」とは一体
どう言う意味だっ!!

ハアア・・・

何か誤解してるみたいだけど
私は今回限りなんて
一言も言ってないわよ？

ハアア・・・

ふ・・ふざけるなっ！
約束が・・違うだろ・・・

約束が違うですって？
失礼な事いわないでよ
今回限りで終わりなんて
一言も言ってないでしょ？

それに何よコレ
まだ出て来るわよ
タクマの精液！
コレだけの量の精液
レディの直腸に
流し込んでおいて
後は知らぬ存ぜぬって
男としてどうなのよ！

これで暫くは
性欲を持て余す事は
無さそうだわね！

プリン

スッ

プル

プル

ゴプ

ゴポ

グイィ

トロー

いい事タクマ？
トレーニングって
毎日するでしょ？
これも同じ事なのよ
何日かに一回は
トレーニングするから
そのつもりでいなさい！

くっ・・・卑劣な・・・
これが虎の穴の
やり方なのか・・・

ぐぬぬ

虎の穴の制裁？
いいえそれはミスXの性裁です！

某月某日、ウォーゲームを間近に控えたG・W・Mの興行は
トラブルもなく予定通りのプログラムを終了した。
ミスXは、自分に与えられた仕事をいつも通りこなすと、
足早に自分のオフィスに向かっていた。
この所、仕事に追われ性欲を処理する事も出来ないでいたが、今夜は
時間に余裕が出来た為、久し振りにドップリ自慰に耽るつもりでいた。
しかしそんな時、スマートフォンの呼び出し音が廊下に響いたのだった。
「ミスX、ミスターXからのコールです」
ミスXの秘書の通称レディが、預かっていたミスXの携帯を渡してきた。
ミスXは、うんざり顔でそれを受け取る。
「はい、ミスXですが・・・」
「ミスX、早急に話したい事がある、今すぐ私の部屋に来たまえ」
「今すぐに・・ですか？少しお時間を・・シャワーを浴び着替えてから・・」
ミスXの声に微かな警戒と苛立ちが滲む。
「着替えなぞどうでもいい、今すぐ来たまえ！キミ一押しの
タイガー・ザ・ダークについて話したい事がある、待っているぞ！」
ミスXはその瞬間溜息を吐くと、何についての話かを悟った。

それから十五分後、ミスXはミスターXの面前に
立っていた。
「さてミスX、タイガー・ザ・ダークの何についての
話かは、理解できているかね？」
ミスターXは鋭い眼光でミスXを見つめた。
「・・・・はい、タクマ・・ダークのレスリングスタイル
についてではないでしょうか・・・」
「その通り・・・今夜私はタイガー・ザ・ダークの
試合を観た・・が、観客はちっとも盛り上がって
いるように見えなかった、そしてここ数週間の彼の
人気投票での下位低迷・・・・その理由を説明
出来るかね？ミスX」
ミスXは、内心舌打ちをしながら説明を始めた。
「タイガー・ザ・ダークのファイティングスタイルは、
一言で言えば独り善がりの勝つためのプロレス・・・
観客の事は二の次・・・と言った所でしょうか・・・」
「うむ・・・分かっているではないか、ならば何故
キミはそれを修正しないのかね？」
ミスターXは不満を隠そうともせず続ける。
「よいかミスX、ウォーゲームが間近に控えておる、
それまでに観客を沸かせられる一人前のレスラー
に鍛え直すのだ！手段は選ばんでよい！」

ミスXは俯き加減でミスターXの叱責を、甘んじて受け入れている。
「手段は選ぶなと仰いましたが・・それはどんな手段でも・・・？」
「そうだ！キミは調教するのが得意ではなかったのかね？ならば
あらゆる手段を用い、タイガー・ザ・ダークを観客を熱く沸かせる
立派なレスラーに調教してみたまえ！」
この瞬間ミスXは、心と下半身で何かが弾けたのをハッキリ感じた。
「・・・お任せ下さいミスターX、ウォーゲーム開幕までに、
タイガー・ザ・ダークの性根を、叩きなおして御覧に入れましょう」
「うむ、この件に関してはキミに一任する、良い成果を期待している ぞ」
「はっ、お任せ下さいミスターX」
ミスXは笑みを浮かべながらミスターXの部屋を後にすると、
直ぐ様タクマの携帯にコールするのであった。

ガバッ
ブルン
ブルン

グニィ
ズラ
プルルン
ブルン
ブルン

ぴく
ぴく
ぴく
ぴく
ぴく

アム
ジュコ
ジュコ
ジブ…
プルンッ
プルンッ
アム
ピチャ
ピチャ
ピク
ピク
ハアム
レロ
レロ
ハアァ
チュプ
ヒク
ヒク
モミ
ハアァ
プルンッ
プルンッ
プル
プル

ハァ!!
ハァ!!
ハァ!!
ハァ!!

ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…

ハァ…
プル
プル
プル
アッ…
ハァ…
チュク
チュク
ツイ
ハァ…
ハァ…
ビクッ
ハァ…
ハァ…
ハァ…

ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
レロレロレロ
レロ
レロ
レロ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ
ぷにゅ

ハァハァ
ガクガク
ハァハァ
ビチャ
ハァッ
ビクッ
ビクッ
ビク

ア
ア
ギ
ギ
ギ

ビクン
ビクン

ハァ
プル
ハァ
プル
プル
プル
ハァ
ガク
ガク

フリ
パン
フリ
フリ
コツ
ボン
バン

ハアー!
ハアー!
ハアー
ヒク
ヒク
ヒク
ビッ
ビッ
プルン
スル
ジッ
スリ
スリ
プル
プル

ハァ…
プル
ハァ
プルン
プル
ハァ…
プル
ヒク
ヒク
ハァ…
ズ
アッ
ル
ヒク
クチュ
クチュ
ハァ…
ハァ…

ビクッ
ビクッ
ハァハァ
ハァ…
ズブッ
ズブッ
ピチャ
ピチャ
ハァ!
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ズブッ

ズッ
ズッ
パン
ズッ
パン
ズッ
パン

チュプ
ハァッ
パン
ハァッ
パン
ハァッ
パン
チュ
ブルン
ブルン
ブルン
ハァッ
チュプッ
ハァッ
パン
ブルン
ブルン
チュ
ハァッ
パン
チュプッ
ハァッ
パン

ハッ
ウッ
ズッ
ジュッ
ハン
アー
チップ
ハン
チブッ
ハッ
アッ
ハン
ハン
ブルルン
ハン
ジュッ
ハン
ジュッ
ハン
ジュッ

ブル
プル
ニアー!
ブル
ブル
オォ…
オォ…
ブル
ブル
ブル

パン
ズブッ
ズブッ
ショォー
アッ
ガシ
ブルン
オォッ
ハァー
アー
チョプ
ブルン
パン
ショォー
チョプ

アッ
ガ
ハァ
ギン
ギン
ハァ!
ハァ
シュルル
ハァ…
ハァ
スッ
スッ

ハァッ
ハァッ
ハァッ
プルン
プルン
プルン
ハァッ
ハァッ
ハァッ
チュ
チュ
チュ
チュ
チュ
チュ
ポ
ハァ
オォッ

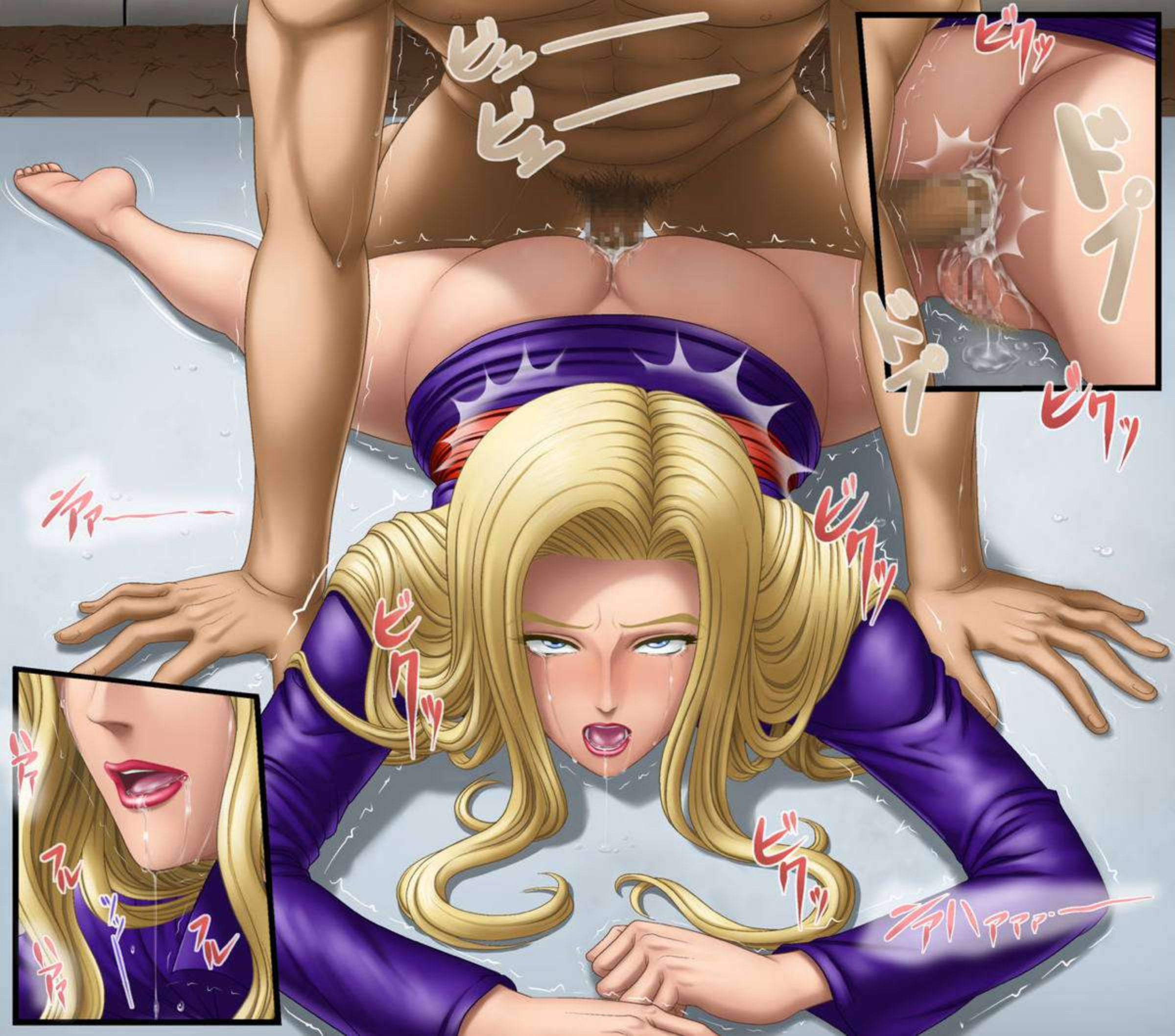
ンオッ！
ンアッ！
プルン
プルン
ハァ！
ズップ
ヌッチュ
ヌッチュ
ンイッ！
ンイッ！
ヌッチュ
オッ！
グップ
グッポ
アッ！
チャッ
スチャ
ヌッポ
ヌッポォ
ンアッ

ハァ
ハァ
ヒク
ヒク
ハァ
ハァ
ハァ

チリュン
チリュン
ハァ
ハァ
ハァ
ヒク
ヒク
ヒク
チプチュ
チプチュ
ハァー
ビクッ
ビクッ
チブブブブ
ジョォ
ハァ

チュプ
チュプ
ハァ
ハァ
ハァ
チュプ
チュプ
ハァッ
チュプ
ハァッ
チュプ
ズプ
ハァッ
チュプ

チュプ
ヌッブ
ヒク
アッ
ドプ
ジュプ
ヒク
ヒク
ズッ
ジュッ
ズッ
ハァ
リュッ
チュ
フル
ハァ
フル
フル


ビュビュ
ビクッ
ドイ
ドイ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
アハアアア
アア
フル
ツッ
フル
アア

ダポン
ブポポ
プル
プル
プル
ハアァァ
ハアァァ
ブル
ブル
ハアァァ
ブリポポポ
ドロロロ

ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…

プリン
グイ
ゴポ
ゴプ
トロー
プル
プル
ぐぬぬ
ぬ
ぬ